

翻 訳

ヘルゲ・ゲルント

現代ドイツの自然神話

— 伝統的な自然理解と今日の環境意識の間で (2001)

河 野 眞 (訳)

【解説】 本稿はヘルゲ・ゲルントの論考の翻訳である。同稿ははじめ1999年にザクセン＝アンハルト州ハレ市で開催されたドイツ民俗学会の第32回大会において多数のスライドをもちいて口頭で発表され、2年後に大会記録(2001)に論文として収録された。大会の総合テーマ「自然 — 文化：民俗学からみた人間と環境」にそった内容であるとともに、大会のロゴ・マーク(図16)にも言及している。タイトルの原語の直訳は「自然神話 — 伝統的な自然神話と現代の環境意識」であるが、はじめに書誌データを挙げる。

Helge Gerndt, *Naturmythen – Traditionales Naturverständnis und modernes Umweltbewußtsein*. In: Rolf Wilhelm Brednich, Annette Schneider und Ute Werner (Hg.), *Natur – Kultur : Volkskundliche Perspektiven auf Mensch und Umwelt*. 32. Kongress der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde in Halle vom 27. IX. Bis 1. X. 1999. Münster [Waxmann] 2001.

その後、同じ著者の論文集『グローバリゼーション時代の文化研究』(2002, 参照, 以下の書誌データ)にも収録された。その点では著者が、近年の主要な成果の一つと自負しているとも見てよいであろう。

次にゲルントの経歴と主要著作である。出身はドレスデンで1939年9月16日の生れである。学歴では、キール大学とウィーン大学において、フォルクスクンデ(民俗学)、ゲルマニスティク、地理学を学び、1966年にキール大学において学位を得た。学位論文は「さまよえるオランダ人と船幽霊 — 海の形象」で、1971年に書物として刊行された(参照, 以下の書誌データ)。キール大学における指導教授はレーオポルト・クレッツェンバッハー(Leopold Kretzenbacher 1912-2005)であった。以後もクレッツェンバッハーを師と仰ぎ、後者が1966年にミュンヘン大学民俗学科を主宰するようになるとともに、ミュン

ヒェンへ移って助手となった。1973年にミュンヘン大学に教授資格論文「四山巡拝 — ケルンテンの民俗行事の現今と歴史」を提出し、同論文は同年中に刊行された（1973, 参照, 以下の書誌データ）。なお〈四山巡拝〉はケルンテン州でおこなわれている特異な巡礼慣習の一つであるが、そのテーマ自体に、オーストリアのシュタイアマルク州出身でオーストリア南域の民俗研究の第一人者であったクレツェンバッハーの強い影響がみとめられる。なお四山巡拝の実際については、ヨーロッパの約 100 カ所の巡礼慣習を文化史と民俗学の観点から概観したクリス／クリス＝レッテンベック『ヨーロッパの巡礼地』に解説が入っているので、次の拙訳を参照されたい。参照, ルードルフ・クリス／レンツ・クリス＝レッテンベック『ヨーロッパの巡礼地』文楫堂 2004, p.96-98 (フィアベルガー・ラウフ／四山巡拝)。1979年にレーゲンスブルク大学教授となったが、翌 1980年には、先に 1978年に定年退職となったクレツェンバッハーの後任としてミュンヘン大学民俗学の主宰となり、2004年に定年を迎えた。

その間、1987年から 1991年まで、ドイツ民俗学会 (DGV) 会長をつとめた。また口承文藝を中心とした大部な民俗学事典でもある『昔話百科事典』の共同編集者として 1994年から活動している。1986年には、ドイツ民俗学会の特別部会として、ミュンヘン大学において「フォルクスクンデとナチズム」のシンポジウムを主催して話題を呼んだ。その記録は、やはりその主編者をつとめた「ミュンヘン大学民俗学研究叢書」(1987, 参照, 以下の書誌データ) の一冊として刊行された。次に主要著作を挙げる。

Fliegender Holländer und Klabaوترmann. Sagengestalten der See. Kiel 1966.
Druck: Göttingen 1971.

Vierbergelauf. Gegenwart und Geschichte eines Kärntner Brauchs. Klagenfurt,
Bonn 1973 (Aus Forschung und Kunst, Bd. 20).

Kultur als Forschungsfeld. Über volkskundliches Denken und Arbeiten. München
1981. ²1986.

Studienskript Volkskunde. Eine Handreichung für Studierende. München 1990
(Münchner Beiträge zur Volkskunde, Bd. 12). ³1997.

Kulturwissenschaft im Zeitalter der Globalisierung. Volkskundliche Markierungen.
Münster u.a. 2002 (Münchner Beiträge zur Volkskunde, Bd.)

Der Bilderalltag. Perspektiven einer volkskundlichen Bildwissenschaft. (=Münchner
Beiträge zur Volkskunde; Bd. 33) Waxmann, Münster u. a. 2005.

ヘルゲ・ゲルト *現代ドイツの自然神話 — 伝統的な自然理解と今日の環境意識の間で* (2001)

編著については、ドイツ民俗学会の大会記録を数点共同編集しているが、それは省いて、次の2点を挙げておく。

Volkskunde und Nationalsozialismus : Referate und Diskussionen einer Tagung der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde. München, 23. bis 25. Oktober 1986, hg. von Helge Gerndt. [Münchener Vereinigung für Volkskunde] 1987. (Münchener Beiträge zur Volkskunde, Bd. 7).

Der Bilderalltag : Perspektiven einer volkskundlichen Bildwissenschaft, hg. von Helge Gerndt und Michaela Haibl. [Waxmann] 2005. (Münchener Beiträge zur Volkskunde, Bd. 33).

主要な研究領域は、文化研究としての民俗学の方法論、口承文藝、現代の日常、絵解きの手法を含む文化史などである。

*

今回、ゲルトを紹介するに当たってこの論文を選んだのは、その研究領域や特色がよくあらわれているかでもある。一種の絵解きが入り入れられており、イコノフラーの周縁に位置するとも言えるが、そうした特徴は早く学位論文が<さまよえるオランダ人>伝承を特に船幽霊の話種とみる角度からの解明であったのと照らし合うものがある。勉学の地が海洋都市キールであったことと重なるテーマでもあるが、その文化史研究の姿勢にはクレッツェンバッハーの手法を受け継いだところがある。クレッツェンバッハーは射程の大きさと該博な知識によって数々の著作を世に送った文化史研究の大家であった。また第二次世界大戦の1960年前後から擡頭した、ドイツ民俗学の伝統をほとんど全否定する革新の動きに対して、過去の問題点に留意しながらも学史上の主要な観点に一定の軸足をおいていた。それゆえ保守派のエースの観があった。時空ともに壮大な文化史的解明が持ち味であるが、要所々々での手堅い資料批判によって前代のような虚論に陥ってはず、改革の旗手ヘルマン・バウジンガーもしばしば一目おくような発言をおこなっている。その研究と手法の実際については、ミュンヘン大学の一般講義の記録でもある著作に拙訳をほどこしたことがある。参照、レーオポルト・クレッツェンバッハー(著)河野(訳)『民衆バロックと郷土 — 南東ヨーロッパ文化史紀行』名古屋大学出版会 1988.

ゲルトの研究をみると、クレッツェンバッハーへの親近性と共に、テュービンゲン大学を拠点とするバウジンガーが先導した民俗研究の新しい行き方にも理解と共鳴しているのは、世代的にも必然であろう。それは勢い立脚点の反省にいたらざるを得ないが、その

辺りの方法論の模索には、1981年の『フィールドワークとしての民俗学』がある。これにかぎらず、方法論への意識はいずれの論考においても強くみることができる。そうした自己の専門分野の原理を常に検討していることにおいて、学界のリーダーの条件をそなえていると言える。またその点で注目すべきは、民俗学を〈文化研究〉(Kulturwissenschaft)と言い換えていることである。ドイツ民俗学界では、



最近の著者 (2011)

一方のリーダーとされる研究者は、概ね、その研究姿勢を明示するために民俗学を指す古くからの言い方〈フォルクスクンデ〉を他の何らかの術語に言い換えている。それは〈フォルクスクンデ〉がその名称のもとにナチズムとの相乗など問題的な過去をかかえているからである。ちなみに、クレツェンバッハーの場合は〈比較民俗学〉(vergleichende Volkskunde)で、これは〈南東ヨーロッパ研究〉の改革者としての標榜でもあった。南東ヨーロッパ研究とは、オーストリアの南部からバルカン半島にひろがる多民族地域を主要なフィールドとする研究領域であるが、その第二次世界大戦後の一つのあり方がクレツェンバッハーの文化史な行き方であった。なお同地域を対象にして、インター・エスニシティを重視するインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンによるマールブル大学の研究方法もある。これについては次の拙訳がその辺りの学史にもふれている。参照、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン(他著)河野(訳)『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』文綴堂 2011.

話題をもどすと、〈文化研究〉は、テュービンゲン大学のバウジンガーが掲げた〈経験型文化研究〉(empirische Kulturwissenschaft)と重なる名称でもある。なおバウジンガーの研究のあり方については、次の2著について拙訳がある。参照、ヘルマン・バウジンガー(著)河野(訳)『科学技術世界のなかの民俗文化』文綴堂 2005.; ヘルマン・バウジンガー(著)河野(訳)『フォルクスクンデー 上古学の克服から文化分析の方法へ』文綴堂 2010.

民俗学を日常研究へとひろげ、また現代を射程に置く視点を確立したのがバウジンガーであり、その成果はドイツ民俗界では学派に限定されずに基礎理論ともなっている。同時に、それぞれの研究者は、自己のかかわる学派の伝統や研究対象や自身の資質から、多少とも独自性をもりこむことになる。ゲルントの場合、それはわりあいはっきりしていて、クレツェンバッハーの文化史研究とバウジンガーが切り拓いた日常研究の新局面のあい

だで、自己の立ち位置をさぐり出したというふうにとらえても、あながちはずれてはいない。それはゲルトの同世代の研究者が多かれ少なかれ直面した課題でもあった。つまり、一方でそれぞれが民俗学を学んだ拠点の伝統があり、他方でバウジンガーが放った刺激を何らかのかたちで取り入れないわけにはゆかなかったのである。参考までに、ドイツ民俗学における有力な拠点の一つミュンスター大学のグループを挙げるなら、彼らは彼らで、ギュンター・ヴィーゲルマンなどの機能主義的方法の伝統と、テュービンゲン大学からはじまった改革志向のあいだで進路をさぐったのである。それはたとえば同学派の現在のリーダー、ルート＝エリーザベト・モアマン教授にも見ることができ、その研究の実際などもいづれ紹介したいと考えている。またゲルトと同年輩で共にミュンヘン大学民俗学科を運営したのはクラウス・ロート教授であるが、そこでも同じく方法論的な工夫を見ることができる。ちなみに、その論考の一つを、本稿と相前後して紹介する運びである。参照、クラウス・ロート (著) 河野 (訳) 「現代ヨーロッパの国際コミュニケーションにおける〈隣人〉と〈隣国〉」愛知大学・国際問題研究所『紀要』139号 2012。

とまれ、研究の視点をめぐるかかる模索は、ゲルトの同世代の共通の課題でもあったろう。つまり直接先立つ世代には、方法論的にも実際の研究成果でも数人の巨大な存在が並び立っており、その避くべくもない影響のなかで、現代にかかわる課題に挑戦したのである。バウジンガーの〈科学技術世界〉(technische Welt) を、ゲルトがここで何度か用いる言い方として〈学術的・科学技術的時代〉(wissenschaftlich-technisches Zeitalter) に置き換えたりしているのは、そうした工夫の一つである。前者は、バウジンガーのキーワードで、科学技術そのものに対して、生活世界における科学技術のあり方を言う。たとえばテレビの仕組みは科学技術そのものであるが、テレビの視聴者はその科学技術的な仕組みを理解しているわけではなく、自己の身体の延長すなわち道具としてテレビを使いこなしていることから知られるように、科学技術との付き合いときの人間の行動は科学技術そのものとは別の位相にあることを指す。ゲルトでは、バウジンガーのその指摘はひとまずおいて、現今の世界は、学術知識、とりわけ自然科学・科学技術の知識が大きく関係し、すなわち科学技術にかんする知識は実生活の場で検証ができる性格のものではなく、情報であること、またそうした時代環境を問題にしている。

本論自体は、環境問題が普遍的なテーマとなっている今日、ことさら解説を要しないであろうが、ここでメスが入られているように、その現代の一般的な話題も、ヨーロッパの人々の場合、理解の仕方が文化的・社会的・宗教的伝統と分かちがたくからみあっている。当然と言えば当然であるが、その実際がどうであるかを見るのは、それはそれで刺激なのではなからうか。ここではモノグラフィーの性格上、現代社会の自然科学とふれあう危機認識をノアの方舟のモチーフにほぼほぼと論じているが、もちろん他のモチーフに

もひろげることはできよう。

最後に私事にふれると、ゲルント氏との交流は、ミュンヘン大学を引退の後、オーストリアのグラーツ近郊の郷里に居をさだめていたクレッツエンバッハー教授を訪ねたとき、同教授から次世代のリーダーとして紹介されたことに遡る。ドイツ民俗学会への入会にあたって推薦状を書いてもらったのもゲルント氏であった。またその研究成果については、すでに20年以上前に、特に『フィールドワークとしてのフォルクスクンデ』を話題にして、簡単ながら紹介したことがある。今回、久しぶりに氏の論考を一般に知ってもらう機会を得たのには感銘をおぼえている。大きくくくれば同世代でもあるためか、氏の方法論上の工夫には実感が湧くところがあるが、それを伝える訳文になっておればと願っている。またその点で一つだけ言い添えるなら、原文では引用文や引用句は地の文と一連のものとして組まれているが、ドイツ人には読過できても、翻訳では論者と論者以外の視点が入り混じるのは理解に不便であることを考慮して、引用を適宜特記のかたちに組みかえた。

図版については、大会記録ではモノクロで、『グローバリゼーション時代の文化研究』ではハイツィンガーの水彩画はカラー写真で収録されているが、ここではモノクロで再録した。

なお翻訳にあたって必要な著作権の手続きでは、これまた著者の好意を得たことを付記する。

(S.K. / 30. Sep. 2011.)

現代ドイツの自然神話

— 伝統的な自然理解と今日の環境意識の間で —¹

ヘルゲ・ゲルント (2001)

ナジマロス¹ はハンガリーの原生的なドナウ河畔の地名である。ミュンヘンの画家で風刺画イラストレーターホルスト・ハイツィンガーが、その風景を突き放した筆致で描いた水彩画は、1989年5月の政治ニュースに対する藝術家の反応だった。ハンガリー政府が、自然保護区のまっただ中に計画した発電所の増設を遂にあきらめたのである(図1)²。科学技術の巨大プロジェクトが、住民の反対運動によって(そう言ってもよければ)まさに水泡に帰したわけである。となると、自然愛好がエネルギー産業に勝利したのであるだろうか。ハイツィンガーの水彩画は、勝利を伝えるというより、むしろ潜在する脅威を物語っているように思われる。一目見れば十分だが、節くれだった瘤のある樹はショベルカーにいつもどつてもおかしくなく、青鷲もクレーンに早変わりする様相をみせている。とすると、当初の開発計画はなお完全に消えさったわけではないのだろうか。あるいは自然の内在的な写し絵としての人間的な文明観念が、あいかわらず自然と結びついているのだろうか。ハイツィンガーが鏡絵のように描いた自然と文化の重なりは、むしろそれが事態の自然なあり方に沿うのだろうか、それとも空想の所産、つまり神話にすぎないのだろうか。これは、少なくとも一考にあたいするメタファーのように思われる。

ハンガリーにかぎらず、世界のどこでも、今日、自然はその原初の形態をおびやかされている。いたるところで、人間は、科学技術の進歩すなわち常に新しく進行する文化の変貌のなかで生きのびるチャンスを模索している。私たちはエネルギーを必要としている。そのためには、ダムや製材所や化学工場や褐炭の露天掘りが必要になる。そうした工業活動は広大な原野を変貌させ、人工による新しい景観をつくり出し、また獲得と喪失をめぐって執拗な社会的葛藤を私たちの生活世界にもちこむことになる。いずれにせよ、自然との付き合いは、私たちには問題のあるものとなってきた。自然に合わせるとは何か、言い換えれば自然のもつ決まりを考慮した責任のある振る舞いとは何か、こうした議論が、今日、熱くなる一方の社会的摩擦において物差しとなっている。しかも、そうするうちに

1 本稿は、スライドをもちいた公開講演として執筆し、当初36点であったスライドの多くは、印刷にあたって割愛した。しかし当初の性格はここでも継続している。なお読者の理解に必要な限りで若干の修正を加えた。

2 Horst Haitzinger, *Globetrottel. Karikaturen zur Umwelt*. München 1989, Abb. S. 55.

も自然は消失しつつある。それへの感得の仕方の幅はひろく、技術革新の担い手や進歩の預言者の誇りにみちた自信から、〈ふつうの市民〉の無関心や良心の痛みを経て、自分の生命と子供たちの未来を心配する若い父母の底なしの不安にまでひろがっている。物心両面で巨大な壁にかこまれて、この混乱した感覚はどのように解決できるだろうか、あるいはどうすれば、少しは耐えることができるものに作りかえることができるだろうか。学問研究がはりめぐらされた世界では、これまた学問に突きつけられた課題である。

しかしここで、ちょっと待て、と言わなければならない。文化研究がどんな権利があって自然をテーマにすることができるのだろうか。それは、本来、自然科学者の対象領域ではなかろうか。この設問への回答をめざしたのが、1999年にハレで開催されたドイツ民俗学会の大会であった。そこでは、それぞれの発表においてそれぞれの新しさをもってこの問への取りまとめが試みられた³。たとえば、自然を文化としても理解することができ、またしなければならぬ／自然物の取り扱い、自然をめぐる理念と思念、自然的とされているものの価値づけ、これらは文化的な現象である／さらに先鋭な言い方をするなら、自然として観念され、あるいはそうよばれるところのものは文化である／なぜなら、それが、あらゆる対象にかかわる私たちの人間的な（伝統のなかではヴァアエティをもって媒介される）知覚のあり方だからである／さらに鋭角的な言い方をするなら、人間の意識の彼方にある独自の自然などは存在しない／これは誰もがみとめるように論議になろうし、また問いをさそいもする／すなわち、自然とは神話にすぎないのであろうか。と。

自然であるところのもの、また自然が意味するものが姿をあらわすのは、私たちが自然をどのように語るかにかかっている。たしかに系統的な認識をもたずとも、私たちは常に自然について了解をしている。私たちは、日常の思考や行動において、ほとんど筆舌を超えた規模で、分かり切ったものとして自然とかかわっている（たとえ、自明のはずのものが、自然災害によって破壊されたり、海洋では自然を代替する構築物が海の底に沈んだりすることがあるとしても）。一般のディスカッションでも、かつてないほど自然が議論されていることは疑えない。自然は議論の中心に位置し、またしばしば熱をおびた論争テーマでは第一位にあると言ってもよい⁴。

以下でとりあげるのは、次のような問いである。自然との私たちの付き合いには、どの

3 参照、本書所収の諸論考。

4 例えば次を参照、Götz Großklaus, Ernst Oldemeyer (Hg.), *Natur als Gegenwelt. Beiträge zur Kulturgeschichte der Natur*. Karlsruhe 1983.; Gernot Böhme, *Natürliche Natur. Über Natur im Zeitalter ihrer technischen Reproduzierbarkeit*. Frankfurt/Main 1992.; Peter Janich, Chr. Rückhardt (Hg.), *Natürlich, technisch, chemisch. Verhältnis zur Natur am Beispiel der Chemie*. Berlin/New York 1996.

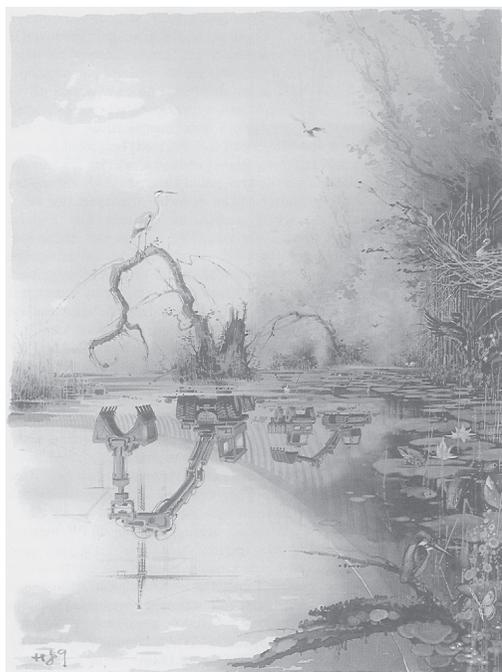


図1 ナジマロス (ハンガリーの湿原) 1989年5月
ホルスト・ハイツィンガー画

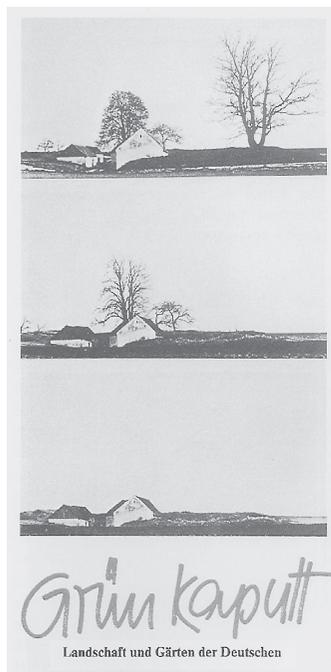


図2 「景観は？ ドイツ人の庭は？」
1983年ミュンヘンで刊行された
書物の表紙

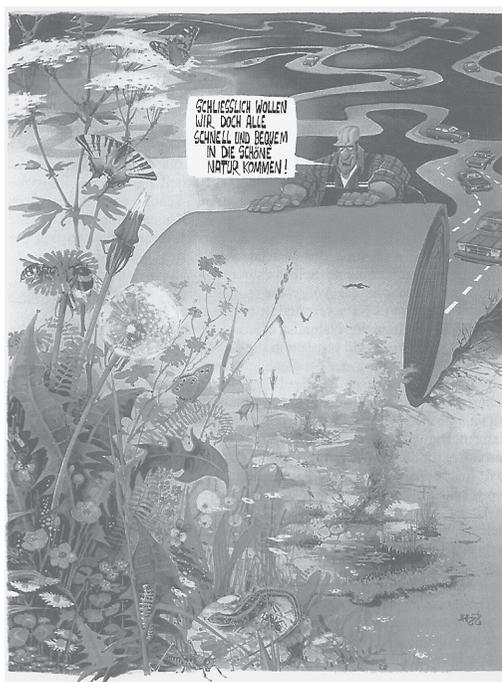


図3 <美しい自然の場所へ速く快適に着きたいものだ>
1988年4月 ホルスト・ハイツィンガー画



図4 勇敢なテプファー環境相：<バルト海と北海を救うために私たち全員が犠牲にならなくては>
1989年5月 ペプシュ・ゴットシェーバー (Pepsch Gottscheber) 画
*クラウス・テプファー (Klaus Töpfer 1938生)：キリスト教民主同盟の国会議員としてコール内閣で環境大臣 (1987-98)、次いで「国連環境計画」(UNEP 本部はナイロビ) 事務局長 (1998-2006)

ように、またどの程度まで神話の次元をもっているのか。それをどのように考えるべきか。またその側面はどの程度まで文化研究としてのフォルクスクンデ（民俗学およびその観点からの実践）にとって意味をもち得るのか。

摩擦、それとも：私たちにとって自然とは何か？

私たちが生きている世界は形象にとりかこまれている。また形象の網目のなかにある。そのなかで自然現象もさまざまな現れ方をするが、通常、それらは二次元的に知覚される。テレビの画面の原生林のドキュメント、円筒形のビールの広告柱、切手に印刷された自然景観などが仲介するのは、あざやかに見ることができるとしての自然である。自然の多様であることを知るがよい！自然が何であるか、そのすべてを味わえ！美しい自然のあるふるさとに誇りをもて！—これに対して、1983年にミュンヘンで企画されたドイツの自然と庭の写真展はコントラストを鋭く際立たせていた。曰く、〈緑の崩壊〉⁵。カタログのカヴァーがすでにそれを表していた。はじめに大きな樹木が消え、次に木々や灌木が同じ運命をたどり、最後は不毛の土地が残る。カタログはその根拠を挙げる。 図2

自然をこれほど整理し、平らにし、剪定し、そして埋めてしまった世代はかつて無かった／かくてアスファルトとコンクリートに覆いつくされ毀しつくされた。

また、絶望は変化することだけにあるのではないとも言う。そこで起きるくけばけばしく安っぽいものへの低落、姿がそこなわれ、趣と質が失われる⁶ことにあるともされる。審美的な感受性と価値意識へのまことに辛辣な物言いだ、展示を企画したミュンヘンのエコロジー研究協会は、それから7年後にも、新たなプロジェクトを実行した。それは審美的な問いを実存問題にまで先鋭化させたものだった。

1990年、それはこう謳われた。〈存在し続けるのか、それとも存在を終えるのか〉⁷。自然への工業的介入が劇的な変容にまでいたったことが、ヴィヴィッドにしめされる。まるで巨人たちの隊列しながら延々と電柱が列をなす結果、個々の樹木だけでなく、森全体がほろびるしかない。かかる〈自然への遠征〉への告発が熱を帯びる。遠大に練り上げら

5 Dieter Wieland, Peter M. Bode, Rüdiger Disko (Hg.), *Grün Kaputt. Landschaft und Gärten der Deutschen*. München 1983.

6 同上, S.7f.

7 Sylvia Hamberger, Peter M. Bode, Ossi Baumeister, Wolfgang Zängl, *Sein oder Nichtsein. Die industrielle Zerstörung der Natur*. München 1990.

れた遠征の計画だが、それは一国の、また国際的なコンツェルンの近視眼的な利益に奉仕するためだ、と言う。そのあからさまな文明批判は、モラルにかかわるスローガンで締めくくられた。

この惑星の生命を存続させるには、私たちが変わらなければならない⁸。

しかしそれからさらに7年が経ち、もう一度企画が手がけられとき、展示チームはずっと冷静になり、怒りを抑えたものとなっていた。最新の1998年の写真展のテーマは「美しい新たなアルプス」である⁹。そこに写っている景観は一目見るかぎり希望にみちている。カタログのカバーの上半分には大都会が霧かスモッグの下に隠れて広がり、それと鮮やかな対比をなして、地平線上に山並みが延びている。カタログの下半分の写真では、コントラストはいつそう印象的で、輝くアルプスとミュンヘンの町の遠望が写っている。それは、自然と文化との妥協をあらわしているのであろうか、それともリアリティであろうか、ヴィジョンであろうか、あるいは見果てぬ夢だろうか。この展示は、カタログの著者たちによれば、〈アルプス神話とアルプスの現実のあいだの綱渡り〉¹⁰で、アルプスの破壊に対する抵抗の表明であり、未来形成へのモデルを示していると言う。

この3種類の企画を振りかえって言えるのは、15年間のあいだにエコロジーをめぐる抗議の熱のカーブが下がってきたことであろう。抗議は1990年頃に頂点に達し、現在ではおさまってきている。自然への社会のかかわりの変遷をうかがわせる兆表は見紛いようがない。しかし視点に変化をきたした今日、そこにはアイロニックな（あるいは辛辣な）低音も聞き洩らせない。〈美しい新たなアルプス〉。この言い方は、オルダス・ハクスレーのユートピア小説『すばらしき新世界』*を想起させるところがある。1932年に発表されたユートピア小説で、進歩へのナイーブな信仰と自然科学を戦術的に使うことへの警告であった。そこで描かれる未来社会には、自己決定も創造性も愛もない。総じて、先に挙げた映像が語るところのものは、昨今の時代におけるニュアンス豊かで変化の可能性をひめた自然理解である。加えて、自然への私たちの関係はアムビヴァレントである(図3)。

要するに、美しい自然にすばやく楽に行き着きたいわけだ。

8 同上, S.7.

9 Sylvia Hamberger, Oswald Baumeister, Rudi Erlacher, Wolfgang Zängl, *Schöne neue Alpen. Eine Ortsbesichtigung*. München 1998. なお、この他の企画は1986年の「夢魔、車」(*Alptraum Auto*)と1993年の「美しい森はない」(*kein schöner Wald*)であった。

10 上の展示会へのチラシ。

道路建設を進める人たちのそうした言い方が耳にこだまする。彼らは、草地も沼も小さな生き物も押しつぶしてアスファルトをどこまでも伸ばしている。それは他ならぬ、自然体験を肌で感じるものにしたいという都市住民やドライバーの憧れを満たすためである¹¹。たしかに事態はジレンマをふくんでいる。自然を活用しようとする人は、自然をある程度こわすしかない。これは大衆社会の大衆的希求のおもむくところでもある。しかし亀裂はもっと深い。自然との矛盾した付き合いは社会的諸条件に多面的に錨をおろしている。

今日、あらゆる社会的階層が自然を同じ仕方で活用できるなどということはありません。その前に資本が立ちはだかっている！しかし災害が起きると、あるいは自然の基礎的容量を超える酷使への責務ある人々がいわば更生へとうながされると、事態は別の面を見せる。万人が犠牲を捧げられることを余儀なくされるのである。この関係を槍玉にあげるカリカチュアもそれに加わる。一面では大工業による、他面では家庭に起因する環境汚染をめぐる啜うほかないミスマッチを取り上げるのであるが、それ自体が安全弁となってしまう。つまり、事態を変える代わりに、現実を斜に見るがゆえに、人畜無害なのである(図4)¹²。そうしたカリカチュアにあっては、自然と文化の関係は、社会的なグロテスクの領域へ入りこむ。たぶん、自然への責任では万人が等しいとの宣伝から見れば、日常の神話を語ることをロラン・バルトと共にすることになるかもしれない。人間が等しいことは、擬似的に〈自然な〉所与としてあらわれる。しかしよりリアルな現実、カリカチュア画家が示すように、それは〈あやまった見かけ〉であり、社会政策の茶番になる¹³。

第一の事実的局面、第二の社会的局面とならんで、第三の局面がある。それは、自然にむかいあったときのアムビヴァレントな姿勢に焦点をあてるもので、問題をはらんだ社会的連関から導き出されるものではない。それはまた、断固たる(それによって自然—文化の二重存在としての人間存在が尺度を獲得する)視角を示唆している。すなわち人間の個人意識である。しかしこれは、混合した感情で自然をみつめることでもある。すなわち、自然は喜びをあたえ、同時に不安をいだかせる。自然への多いなる情愛がこみ上げるのは、たとえば収集熱においてであり(標本針でとめた蝶の列)、あるいは消費欲(虎皮や、ワニ革のカバン)が羽ばたくときであり、死せる情愛である¹⁴(図5)。

しかしもっと実存的な意味において、自然と文化のあいだの関係は、人間にとって生きることと死をめぐる問である。すなわち、私たちはこの地上にあって、健康な自然風物と

11 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.59.

12 ペプシュ・ゴットシェーバー (Pepsch Gottscheber) の諷刺画「勇敢なテプファー」(*Töpfers Offensive*), *Süddeutsche Zeitung*, 24 V. 1989.

13 Roland Barthes, *Mythen des Alltags* [1957]. Frankfurt/M. 1964, 参照, S.7.

14 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.25.

精神的・物質的文化伝承を必要とする。自然的位相から文化的位相への境界の跨ぎ、また二つの位相の間の折り返しは、誕生と死において特に一目瞭然である¹⁵。人生のこの二つの階梯が、アレゴリカルな潜在力をもつ（＜母なる自然＞と＜父なる死＞という言い方がされる）のは根拠のないことではなく、事実、それらは神話に囲まれて存在する。

具体化の多くの局面において、自然は、人間の実存的問題として経験される。しかし以下の考察では、自然の（どれほどそれが重要なテーマであろうとも）独自の内実はまだ踏みこまず、外的自然の表出への人間の付き合いに限定しておきたい。そのときどきの自然理解は、（諸々の伝統のアマルガムで、また個人の経験という篩にかけられてもおり）、人間の歴史を通じ、また個々人の人生を通じて常に変化をけみしてきた¹⁶。前近代の理解をやや大づかみに特徴づけるなら、そこでは自然が人間を支配し、人間の生き方を条件づけていたのだった。すなわち、自然は人間にとって、命をあたえてくれるものであり、また命をおびやかすものであり、それゆえ人間は自然から自分をまもらなければならなかった。次いで近代が始まると、それへのアンティテーゼが頭をもたげた。人間は自然を原理的には支配することができると言うのである。人間にとって自然は、自己の側へ取りこむことのできる対象であり資源である度合いが時を追ってはげしくなった。そのときどきの特殊な文脈のなかで、自然概念の意味はそのときどきの（自然に対して人間が）相対する仕方次第となったのである¹⁷。ときには、（自然の所与に向きあったときの）人間的同致としての分かりきったものであった。さらに（自然的・原初的なものに向きあって）派生的なものとなされた。あるいは（有機的に生長したものに対する）藝術や人工性となった。ロマン主義の時代を経過するなかで、自然の特殊な対極として、科学技術が姿をあらわした。しかしそこで事態は複雑にもなった。それは、19世紀を通じてすべての科学技術者が、（ロマン主義の自然哲学にあらがって）当時の自然科学の一般的な先端を自己のものとしたわけではないことを見ても判明する。たとえば、1872年に刊行された『発明の新書』の第二巻のタイトルでは、自然と科学技術のあいだの調和のアレゴリーを歌っている。

科学技術の母としての自然¹⁸。

15 例え次の前掲書を参照、In: Böhme, *Natürlich Natur* (注4), <身体, すなわち私たちが自分自身であるところの自然> (S. 77-93), <自然分娩はどのように自然であろうか> (S. 94-104).

16 Stefan Heiland, *Naturverständnis. Dimensionen des menschlichen Naturbezugs*. Darmstadt 1992; Karen Gloy, *Das Verständnis der Natur*. 2 Bde. München 1995-96.

17 Robert Spaemann, *Natur*. In: H. Krings, H. M. Baumgartner, C. Wild (Hg.), *Handbuch philosophischer Grundbegriffe*. Bd. 4. (München 1973), S. 956-969.

18 Joachim Radkau, *Natur und Technik – eine dialektische Beziehung?* In: Richard van Dülmen (Hg.), *Die Erfindung des Menschen*. Wien 1998, S. 389-408, hier Abb. 224, S. 393.



図5 <皆さんが、私のように自然を愛するならばだ……> <もうすぐ全部おわりだね>
1985年6月 ハイツィンガー画

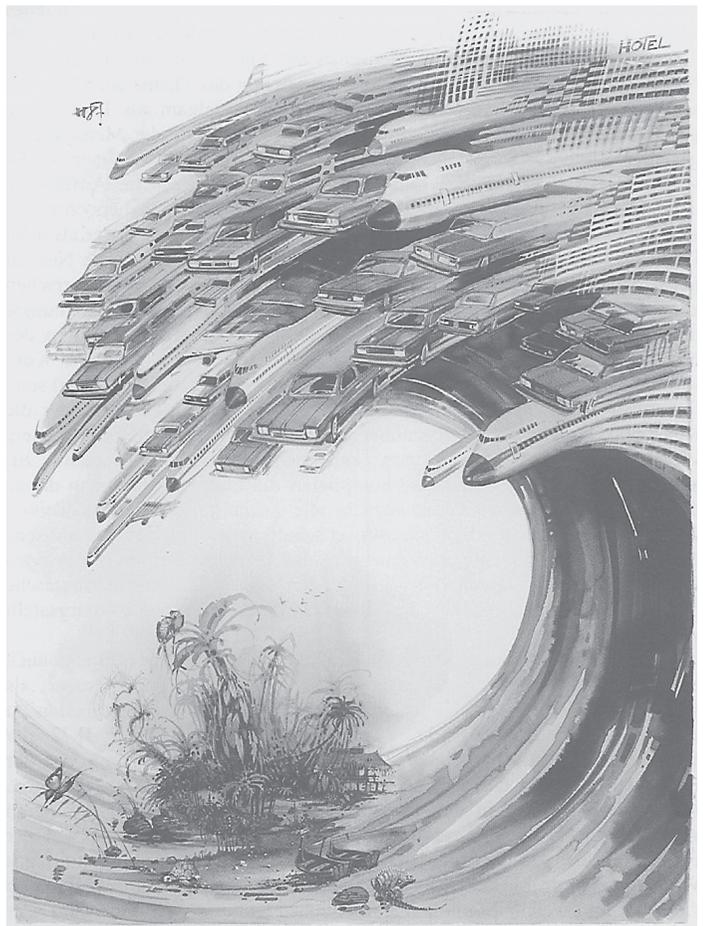


図6 このバランス！ 1987年8月 ハイツィンガー画

同時に他面では、和合のイメージとは逆に、対抗的な観念もひろまった。自然は、ひ弱なパートナーとまでみなされ、それゆえ科学技術の発展と占領からまもってやる必要がある、というのである。これが国立公園設立の根拠でもあった¹⁹。しかしまた、人間が道具をもちいて自然に加えた危害に対して自然が復讐に出るとの観念も擡頭した。すでに1852年の『報知週覧』*には、人間の姿をした敵対者を樹木が鋸引きにしているイラストが入っている²⁰。またテオドル・フォンターネのバラード「テイ湾の橋」(1880)*では、大嵐が魔女さながら、人間の技術の粋である橋を打ちくだく。しかし、自然が人間文化の所産との決闘に勝つのか、それとも負けるのかは、個々の事例によってまちまちである。ツーリズムの『神秘紀行』²¹ (ハイツィンガーのファンタジーゆたかな小誌のタイトルで、それがあつかう緑茂る観光に島については後にとりあげる) では、自然と文化の関係における20世紀の新しい観念の型が姿を見せている。生活空間を覆うネットワークの強まりである²²。エコロジーの理解では、自然世界と人間的文明はたがいに密接にからんでいる。観光客を閑静な場所へ連れて行ってくれる交通手段があふれ、ツーリストのいづく自然への夢を、洪水さながら大波でひきさらってゆく(図6)。

ここでの試みは、一口に言うなら、19、20世紀における自然理解の変遷への理念史的な補足という程度である。またそれにあたっては、民俗学の視点から日常史的な検討を加えてみたい。

フォルクスクンデ(民俗学)は好んでミクロの分析に傾斜し、広い民衆史の具体的な日常生活から出発する。とは言え総じて、自然理解の概観をして解明することは比較的稀である。民俗学の包括的なモノグラフィーのひとつであるハンガリーのアタニー村の研究にも、<自然>の概念はあらわれない。特定の植物や動物や土地や命運がとり挙げられるだけである²³。また別の例では、1830年にチロールの奉納画では山頂で測量作業中に強烈な落雷に遭った様子が描かれている²⁴。その自然現象を、奉納者はキリスト教にのっとった世界秩序としてまとめあげ、マリアの願像への信心へと向かった。この奉納画が描かれて施納されたのと同じ頃、民俗研究者たちは、村落民衆の言い伝えを収集し始めており、ま

19 第一号はアメリカのイエローストーン国立公園 (Yellowstone Nationalpark /USA) であった。

20 Radkau, *Natur und Technik*. (注18), Abb. 223, S.392.

21 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2), Abb. S.65.

22 参照, Frederic Vester, *Unsere Welt – ein vernetztes System. Eine internationale Wanderausstellung*. Stuttgart 1978.

23 Edit Fél, Tamás Hofer, *Bäuerliche Denkweise in Wirtschaft und Haushalt. Eine ethnographische Untersuchung über das ungarische Dorf Atany*. Göttingen 1972.

24 Lenz Kriss-Rettenbeck, *Ex Voto. Zeichen, Bild und Abbild im christlichen Votivbrauchtum*. Zürich, Freiburg /Br. 1972, Abb. 168.

たそれらを神話伝承の残滓と受けとめたのだった。伝説とは、 ^{Folk} 民の造形的な創造性がく自然知覚を、身体ある存在としての神々へと移し換えた²⁵ものと考えられたのである。農民や狩人や漁師にとっては、稲妻や雷にはゲルマンの神々の仕業が現前するのであり、彼らの目には薄明りや立ち上る霧のなかから妖魔の姿が迫ってくるのであった。彼らの意識を特徴づけるのは、自然神話的な観念世界と考えられたのである²⁶。

研究者の〈発見と発明〉、また民のいとなみ*の起源とそれへの遡及、これらをめぐる認識論的問題はここでの考察の外に置くほかない。しかし、19世紀には、此処かしこで、自然魔術的・神話的観念が作用したことは議論の余地がない。同時に他方では、ロマン主義の自然感情に触発された理想化され矛盾にみちた自然感情が市民社会に特有のものとして形成されたことも、民俗学の側からの厳密な分析によってあきらかにされてきた²⁷。いずれにせよ、伝統的な世界においてまとまった自然意識がどうであったか、また伝統的な自然理解がどうであったかを明確に定義することは難しい。研究を深めると、新たに細分やく微妙な差異²⁸が見えてくるのである。これは、文化研究が一般化や重点の設定や方向付けに意をもちいる必要が無いということではない。逆であり、エキスパートが重きをなすいずれの世界でも、複雑なものを集約するのは、ますます意味をもつであろう。それだけに目的があきらかであることも必要になる。それが具体的には何を意味するか、次にこれにしばって検討しよう。

考察、あるいは、私たちはいかに自然をあつまっているのか？

次に時代を飛ばして、現代の環境意識の諸側面にかかわる考察をスケッチしたい。熱帯雨林が巨大コンツェルンの連合によって挽き肉機にかけられ、お金にく仕立てられてゆく²⁸のは、自然資源の恥知らずな略奪を知らしめる図柄として効果十分である²⁸。それは、19・20世紀の工業社会の基調を射当てている。しかし、自然への介入や封殺は別の仕方でも行なわれている。それはしばしばもっと精巧で、しかも深刻な突き入り方をし、また

25 Ernst Ludwig Rochholz, *Naturmythen. Neue Schweizer sagen*. Leipzig 1862, S. V.; また次も参照, Ludwig Laistner, *Nebelsagen*. Stuttgart 1879.

26 参照, Leander Petzoldt, *Dämonenfurcht und Gottvertrauen. Zur Geschichte und Erforschung unserer Völkssagen*. Darmsatdt 1989, S. 48-51.

27 例えば次の研究を参照, Orvar Löfgren, *Natur, Tiere und Moral. Zur Entwicklung der bürgerlichen Naturauffassung*. In: Utz Jeggle, Gottfried Korff, Martin Scharfe, Bernd Jürgen Warneken (Hg.), *Völkssagen in der Moderne. Probleme und Perspektiven empirischer Kulturforschung*. Reibek 1986, S. 122-144.

28 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S. 69.

屈託がない。

この点で、いくらでも事例を提供してくれるのは消費産業であろう。そこではあらゆる部門において、自然が模範とされている。住まいの広告でも、服飾や食生活の宣伝でも、化粧のCMでも、自然らしさが高い価値をもつものとして取り上げられる。つまりビジネスの観点から大いに活用できるものとなっている²⁹。それゆえ多種多様な視点と連想が活発にうごいている。美的な高級感が特にそうである。たとえば、ビールは、自然のあたえてくれる〈真珠〉と表現される³⁰。もちろんこれはミネラル・ウォーターにとっても意味のあるうたい文句になることであろう。

意味の連関だけではない。言葉の遊びは、ずっと前からすこぶる自由な連想と情動になっており、私たちの日常の多彩な表層でその都度ヒットしてきた³¹。日常研究あるいは民俗学が記述すべきこととは何か。ミュンヘン市行政当局は1999年にキャッチフレーズを掲げた。〈最も美しい都市のために最も冷たい水〉を約束したのである。つまり大都市の飲料水、それを最上級で言い表わすのであるが、そこに霊的なオーラが付与されている。だからとて、この標識を過度にいじって、社会のなかの宗教的希求といった評価にまで走り、そこにこもる理念をさらに細分しようなどとすると、却って厄介な事態になりかねない。むしろ私たちがなすべきは、問いかけることである。世界のなかで、情報のなかで、各人にとって、目的のそれぞれにとって、任意に使えるものはなにか、図像や理念や意味解きの型のなかで、任意に、真剣に、アイロニックに、あるいは僅かな効果のためにのみ、活用されるのは何か、さらにそうした世界のなかで因果関係をもとめるものである学問的分析がなし得るのは何か、そもそも情報社会の日常にかんする長期的で系統的な知識はあり得るのであろうか、といった問いである。

経済的成功を最大限にするための手段として自然を活用することと並んで、最近では、自然をパートナーとして位置づけるソフトな活動も加わっている。ルール地方の中心地点で開催された工業都市建設万国博覧会・エムシャー公園*などにそれを如実に見ることができる。これは、最近にいたるまでの10年の期間で実現されたプロジェクトで、文明によって破壊された都市の開発・再自然化の可能性をさぐるとともに、自然と文化の調和を

29 参照, Böhme, *Natürlich Natur* (注4), Kap. „Künstliche Natur“, S. 183–199.; 一般的に論じたものでは次を参照, Bärbel Kerkhoff-Hader, *Werbewirksam. Medienvermittelte „Volkskultur“*. In: Bayerisches Jahrbuch für Volkskunde 1997, S. 57–76.

30 これはクロムハバツハ・ビール社 (Krombacher Brauerei) のキャッチコピー (1999) である。

31 参照, Helge Gerndt, *Innovative Wahrnehmung im Tourismus*. In: Christoph Köck (Hg.), *Reisebilder. Produktion und Reproduktion touristischer Wahrnehmung*. (Vorträge einer Tagung in München, April 1999). Münster u.a. 2001, S. 11–20.

ヴィジョンとして工業地帯の隣接地域が会場となった³²。石炭・製鉄工業がその地域を致命的なまでに変貌させてしまい、土地が未来を失った後、日常の生活世界のなかでの文化と自然のより穏やかな関係が模索されたのである。景観づくりのパートナーたちの呈示した解決案は、それぞれちがった公園づくりをめざしていたが、いずれも保養・産業・サービス・学術の複合エリアであった。ツーリズム・マネージャーたちの構想には、200kmにおよぶ観光ルートがふくまれ、そこでは〈工業文化 — 工業自然〉(Industriekultur – Industrienatur)の二面性のもとに新たなレジャーランドづくりが志向された³³。〈工業文化〉が意味するのは、過剰となった工場あるいは炭鉱労働者住宅団地を(現にそうであるように)ミュージアム化して事足りれとするのではなく、展示物に転換された高炉・巻き揚げ塔・ガスタンクを藝術作品とみなす切り替えである。ではもう一方の〈工業自然〉というパラドックスは何であろうか。

〈工業自然〉が指すのは、かつて工業地として犠牲になった不毛の地が自力回復へと進んでゆくという意味で、特殊な〈自然〉である。〈工業自然〉とは、放棄された炭鉱を動植物界が奪回し、昔の工業立地を〈餌食にする〉ことであり、そうした場合の自然界を指している³⁴。この貪欲な自然のイメージにはアルカイックな自然神話を想起させるところがある。しかしプロジェクト・マネージャーたちがリサイクルの過程のなかで自然に託したのは、むしろパートナーの役割であった。もっとも他面では、彼らのそうした言い方には、工業活動を〈コントロールされた破壊〉に誘導するといったニュアンスがあり、その点では進歩への楽観主義がなお響いている。すなわち、自然がその自力に委ねられていると見える場所ですら、実際には人間がその自然の動きをなお支配できるというわけである。

しかし公共の活動分野において、自然は新たな役割を獲得ないしはその方向へうながされることになった。ぼた山のつづく土地景観をその人工の山々に藝術として手を加えて際立たせるといった行き方で、たとえばボトロップ(ルール工業地帯のかつての炭鉱の町)の残滓の山を正四面体に切ったユルゲン・LIT・フィッシャーの造形がそうである³⁵。これが示すのは、目もあやな自然を引き連れたものとしての生活世界の〈改良者〉たる人間である。人工的な自然を伴う生活空間をこうして審美化するのは、自然を精神的に引き寄せる

32 Andrea Höber, Karl Ganser (Hg.), *Industrie Kultur. Mythos und Moderne im Ruhrgebiet*. Essen 1999.

33 同万博のカタログを参照, *Internationale Bauausstellung IBA – Emscherpark*. Gelsenkirchen 1999.

34 Jörg Dettmar, *Die Route der Industrieanatur*. In: Höber/Ganser (Hg.), *IndustrieKultur*. (注32), S.67-70.

35 Höber/Ganser (Hg.), *Industrie Kultur* (注32), Abb. S.118.; また次も参照, Franz-Josef Brüggemeier, Michael Toyka-Seid (Hg.), *Industrie-Natur. Ein Lesebuch zur Geschichte der Umwelt im 19. Jharhudert*. Frankfurt/M., New York 1995.

行為、あるいは自然との対話と解されることが少なくない。しかし、その場合、人間と自然は本当に対等なパートナーなのであろうか。そうした活動によって、自然への寛容なかわり方を新たに身につけたとうぬぼれてもよいのであろうか。あるいは、経済的な効果とむすびついているかぎり、口に出せるようなものではなかろうか。

人間が自然に加えた整頓の系譜をたどって最近のできごとを追うとき、いやおうなく行き着くのは、アメリカ合衆国の北西に位置するセント・ヘレンズ山*であらう。1980年、100年の〈休眠〉から覚めるや、山頂から400メートルが吹き飛ばされた³⁶。災害の規模はどんな予測をも超えていた。230平方マイルの広さの範囲であらゆる生物が死滅した。火砕流、溶岩流、降灰、数カ月にわたる余震の後、地理学者と気象学者の予想では、その地にふたたび生命が根づくには何世代も待つほかなかった。のみならず、さらに大きな被害をもたらす火山爆発がいつ繰り返されるか分からないとも想定された。

ところが、その荒廃した土地に、待ってましたとばかり、かつてない規模で立ちもどった人々がいた。科学者、道路建設の業者、そして観光客である。自然災害で破壊された地域は、1982年に国立公園に指定された。数億ドルの巨費をかけて、52マイルもの真新しい見事なアウトバーンが破壊地域の中心部まで建設された。途中、決まった距離ごとにパーキングエリアが設けられた他、5カ所に観光客のための立派な展望台がそなえられた。そのいずれの内部にも、毎日おとずれる数千人の観光客のために、その時々の特展の案内や映画のチラシ、さらにレンジャー用のパンフレットが置かれている。すさまじい力と威厳をもつ自然ですら、ここでは人間のための教師に、(多面的な複合体につけられた名前では) „Natur's Institute of Higher Learning“ となったのだ。そこでは、発生からまだそれほど経ってはず、いつ繰り返されるか知れない爆発への不安と恐怖が、観念的なあらゆる形態で記録され、まざまざと伝達され、科学的に説明されるのである。

おとずれる人の誰もが強く印象づけられるのは、自然の暴威への人間の無力をまざまざと知ることであり、また自然科学的な予測の無力がいやおうなく明みに出たことである。事実、災害から数年経つと(予想されたよりも数十年はやく)、動物や樹木や花々が根づきはじめた。展示品や説明文のなかで顕著なメッセージの一つとして私たちが出会うのは、自然の動きについてどれほど知識をもっているか、なお私たちが知るところのいかに少ないか、また自然の暴威の前には人間の営為がいかにもろいかである。かくして、自然は畏敬をもって対処せられ、経験される。クレーターにはふたたび山頂が盛り上がっている。それもセンチメートル単位の動きが間断なくつづいている。まるで神秘的な存在が無邪気に身体をふるわせながら眠っているかのようである。それは予想外のものに接する魅力でもある。思いがけず体験することになるやも知れぬものであり、訪れる誰をもとりこにするのである。

36 Barbara und Robert Decker, *Mount St. Helens. National Volcanic Monument*. Mariposa, CA 1997.

自然に向き合って人間がとる姿勢を全体としてとらえるなら、そこでは一つの命題ないしは仮説が成り立つようにおもわれる。日常のなかでの自然知覚や自然現象とのコミュニケーションに、神話的な契機が入りこんでいることである。もっとも、そこでの神話の概念は非常に広義である³⁷。すなわち、リアルな事象が、語り物のような、また非合理性な映像へと高まり、宗教的あるいは擬似宗教的な気圏に入ってゆくのである。神話は、元型的* 経験に根ざしている。すなわち平板な現今への理解の幅をひろげてくれる。さらに、こう問いかけることもできる。神話は、自然経験に変化を加味することに寄与するのであろうか、と。

マリー・メルクの新聞漫画では、樹々が伐採されてしまった丘を、一人の教師に引率された生徒たちが歩いている様子が描かれている(図7)。そこに「森歩きの小径」の看板が立っている。ところが „Waldleerpfad“ と „e“ が二つになっている* (何も無い道の意味になる)³⁸。このイラストは、もはや言葉遊びではない。しかし教師はこう尋ねる。〈何かまちがっているね。誰か気づいたかね〉。この問いには、馬鹿々々しい場面をいくらか上品に

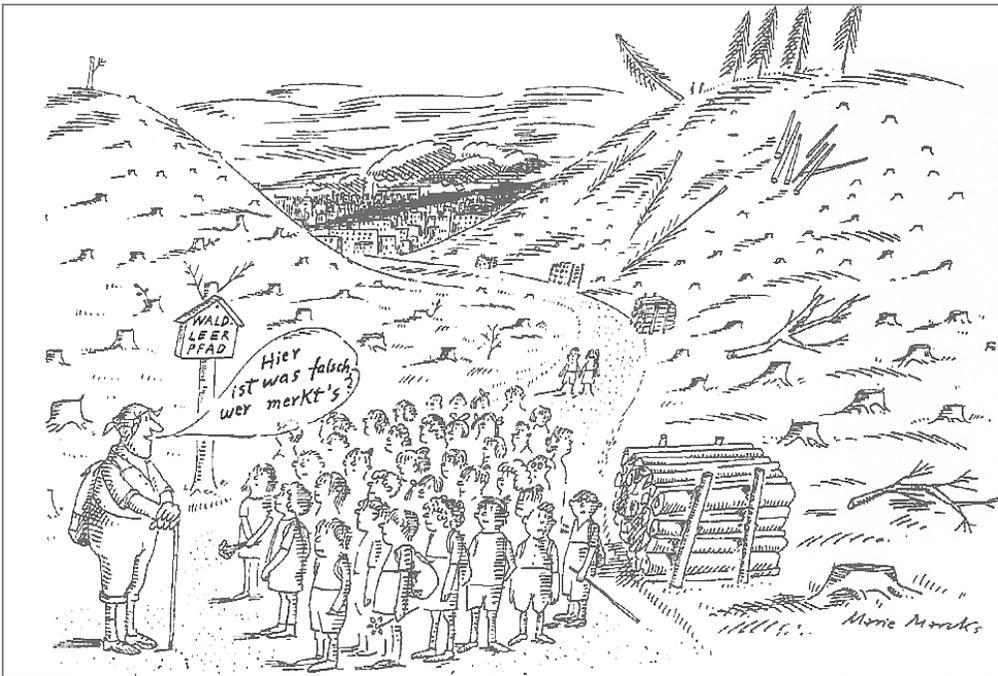


図7 〈表示に間違いがありますが、誰か気づいた人は?〉 1980年代 マリー・マルクス (Marie Marcks) 画

37 特に次を参照, Karl Kerényi (Hg.), *Die Eröffnung des Zugangs zum Mythos. Ein Lesebuch*. Darmstadt 1996.; Gerhard Isermann, *Revitalisierung der Mythen? Gegen den Mißbrauch alter Geschichten für neue Interessen*. Hannover 1990.

38 筆者の収集したイラストから。このイラストの初出は1990年頃の『南ドイツ新聞』(Süddeutsche Zeitung)であった。

してくれる気配がある。と言っても、すでに神話形成のファンタジーがそれと分かるほど活発なわけでもない。あるいは絵には、意味深長なメッセージがこもっていると推測してもよいのだろうか。言い換えれば、特にドイツでは、森とともに神話もまた消滅し³⁹、残るのはせいぜい駄洒落だけなのだろうか。私たちは、このポストモダンの日常のなかで、伝統が重層した神々や世界没落の物語ではなく、出遭うとすれば疑似神話であるという事態を認識する必要があるであろう。すなわち、ユートピアあるいはイデオロギーの形態をとった神話であり、しかもそれは政治的な操作手段でもある。

ハイツィンガーの機知を利かせた描き方には、(現象学的にも時間的にも) ある種の神話的次元がうかがえる⁴⁰。魚からトカゲと猿を経て人間にいたる進化論の段階を描いたイラストでは、恐ろしい死神が添えられているものの、それはホモ・サピエンスがフロンガスの缶詰から逃げてきたという設定である。終末の警告のスケッチでは、定かならぬ人物が、こう叫ぶ。 図8

後戻りしようかな、10年あるから。

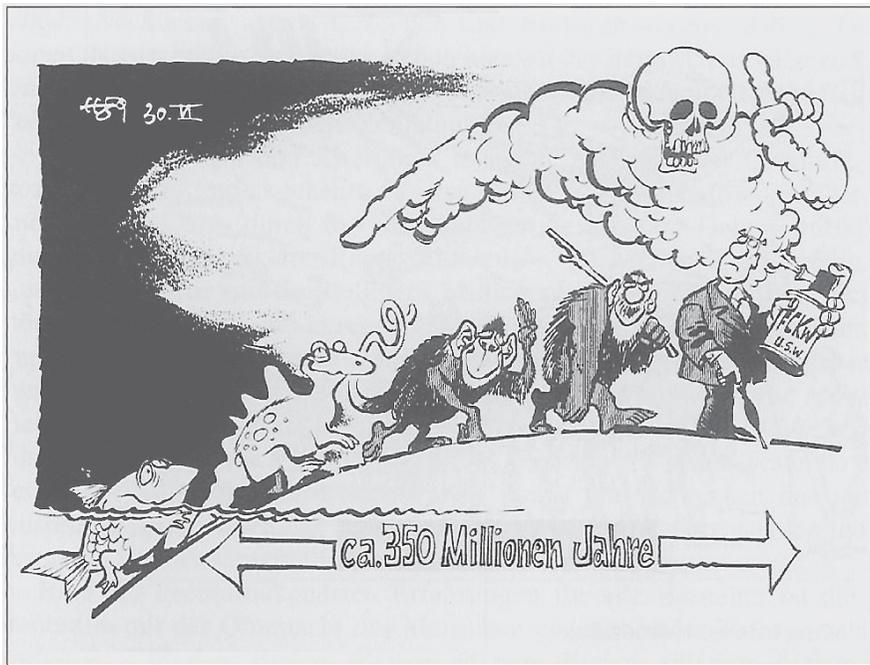


図8 <後戻りしようかな、10年あるから。—3億5千万年の行程> (訳注：1989年に発効した「モントリオール議定書」によって先進国は特定フロン等は1996年、代替フロンは2020年を目安に全廃が課せられたことを指す) 1989年6月 ハイツィンガー画

39 参照, Albrecht Lehmann, *Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald*. Reinbek 1999.

40 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S. 88.

陸上での生物進化が3億5千万年であることとの際立ったコントラストである。それゆえ、このスケッチは、現代科学を踏まえた創造神話のカリカチュア的な表現となっている。

世界の没落のテーマ自体は昔から神話の定番であったが、今日、それは自然のイラスト化のなかで毒性を帯びた描き方をされる。ハイツィンガーのコミック（図9）の下部には一行解説がついている。

海のヒラメ君、小便壺でいいから返してくれないか。

[訳注] 小便壺は貧しい漁師夫婦がはじめに住んでいたあばら家の喩え

その意味するところは一目瞭然である⁴¹。漁師とその妻の物語*（グリム兄弟の昔話に入っているが、もとは昔話ではなかった）が作りかえられ、別の意味におきかえられている⁴²。ここでは、寂しさにうちひしがれた人間が、人間の傲慢で破壊された自然（下水の毒で死骸となった魚）を懸命に呼び戻そうとしている。彼はまた原初の様相、すなわちテレビを通して想像された牧歌的光景をよみがえらせようともしている。私たちが現に位置している現下の状況の救いの無さは冷厳であり、没落は不可避で絶望的である。しかしわずかな希望の微光がないわけではない。ぼつんと一つだけであるにせよ、映像を見ている人たちの昔話・神話の回想的な知識のなかでは、ここで暗示される昔の口承文藝の反対ヒーローもまったく絶滅したのではない。彼らが使った小便壺さながらの破屋くらいは残っていたのである。

注意深く見渡せば、こうした事例はもっと増やすことができよう。学術的・科学技術的時代にあっても、自然をめぐる神話的な語り物の種々の形態や度合いがみとめられる。これは、今日の生活世界にとって何を意味するのだろうか。今日ただいま、人間の自己理解にはどんな意味があるだろうか。そこで学問はどんな役割を果たすのだろうか。学問は何を理解させてくれるだろうか。

アプローチ、あるいは：自然をどう理解すればよいのか？

世界生成の神話、つまり天地開闢の物語とは決別の神話にほかならない。決別は人間の原経験である。すなわち、反省意識を獲得したがゆえに人間が、自分を囲む（人間の生成母体である）自然を後にした事実は、あらゆる学問のはじまりとされている。認識という

41 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.105.

42 参照, Heinz Rölleke, *Fischer und seine Frau*. In: Enzyklopädie des Märchens, Bd. 4 (Berlin/ New York 1984), Sp.1232-1240.

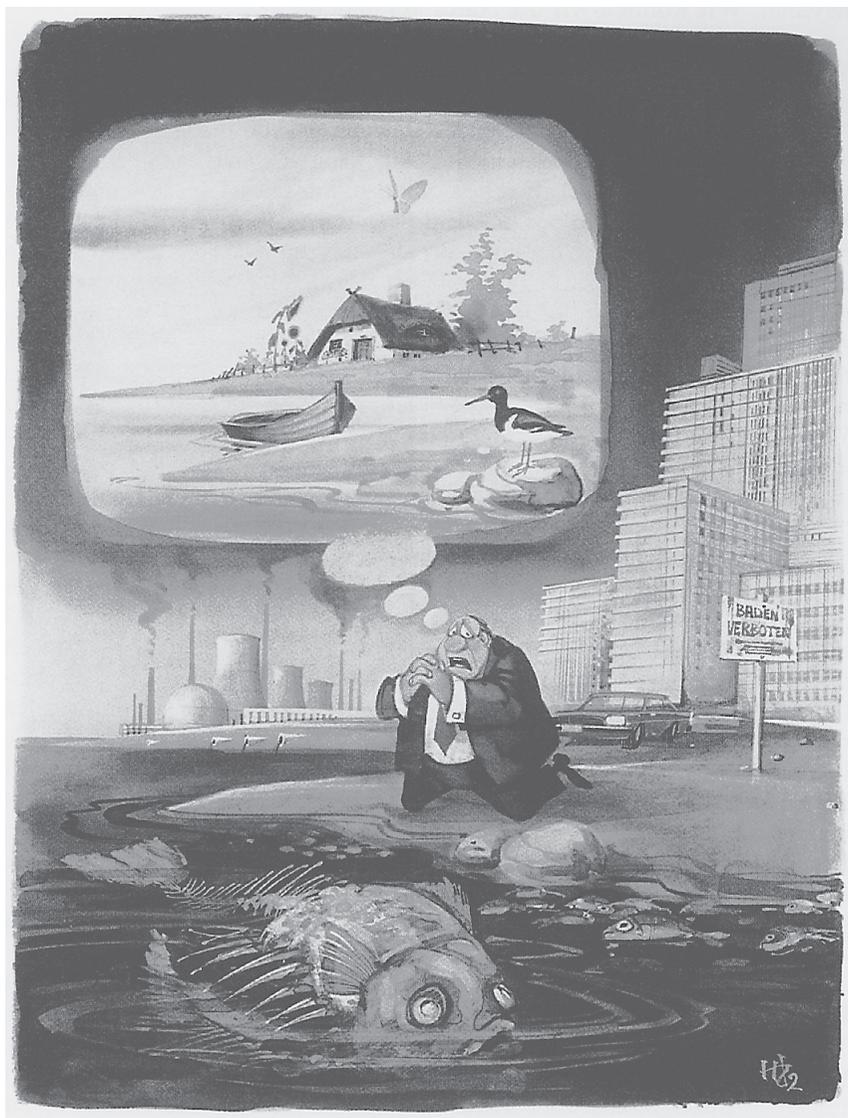


図9 <ひらめ君 小便壺 (みたいな元の家) を返してくれないか> 1982年1月
ハイツィンガー画 *グリム兄弟の昔話をふまえている

墮罪, すなわちアダムとイヴの楽園からの追放とともに一体性の花園は失われた。自然神話として解される神話が語るところでは, そのとき以来, 智天使ケルビムが炎の剣(決別の意識)をたずさえて楽園の入り口に立ちただかっている。しかしそこにはまた, 藝術的であると学術的であるとを問わずあらゆる探求への衝動がひそんでいる。一体であった楽園の破片からもう一度全一の楽園をつくりなおすことである。もつとも, 学問のなかでの再構成の結果として私たちが見るのは, これまた常に新たな破片にほかならない。ヴォルフガング・フリーヴアルトは学問のそうしたあり方をこう定義した⁴³。

一体性を約束してくれ, 同時に決別を生んだところのもの, すなわち世界体系の常により微細になりゆく枝分かれ。

現代の学問となると, やはり自然科学が先頭に来る。人間を自然から分かち, それを極限までおしすすめたのも自然科学であった。その事情を改めて知らしめるのは, さしずめ最近アメリカで刊行された二つの書物であろう。そのうちの一書はこうつぶやく。

自然の終焉 / 自然の死滅。

他方, 1997年に出版された別の一書は, <自然との決別>をうながした。その含意は, 意識的に自然を完全に補完することであるにあるとして, 著者はこんなアグレッシブなサブタイトルをつけた⁴⁴。

生命の未来は科学技術にあり。

片や昔話や神話は, かかる分裂に反抗する。それは, 語り物のイマジネーションによって, 分裂を止揚し, 少なくとも語られているあいだだけでも一体性の魔法をつくろうとする試みである。語り物の内容をかたちづくるのは, しばしば悲劇的な葛藤である。ホルスト・ハイツィンガーは, 人間を, 誇り高くドラゴンを退治する者として描きだす(図10)。逃げ出した自然に逃げ場をもうけてやり, そこに規則をさだめるのだが, それによって自分

⁴³ Wolfgang Frühwald, *Ideenparadiese – Motivationen und Visionen in der Wissenschaft*. In: *Gen-Welten* [Katalogbuch]. O.O. 1998, S. 186–190, hier S. 187.

⁴⁴ Bill McKibben, *Das Ende der Natur. Die globale Umweltkrise bedroht unser Überleben*. München 1992.; Carolyn Merchant, *Der Tod der Natur. Ökologie, Frauen und neuzeitliche Naturwissenschaft*. München 1987.; Ben-Alexander Bohnke, *Abschied von der Natur. Die Zukunft des Lebens ist Technik*. Düsseldorf 1997.

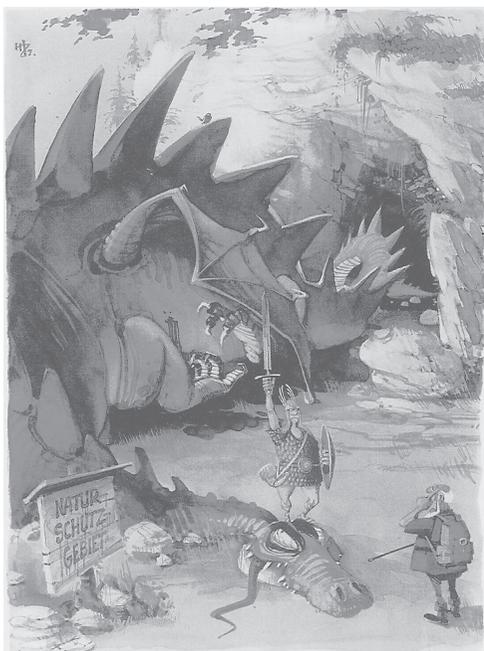


図10 自然保護区でドラゴンを退治 1987年
ハイツィンガー画

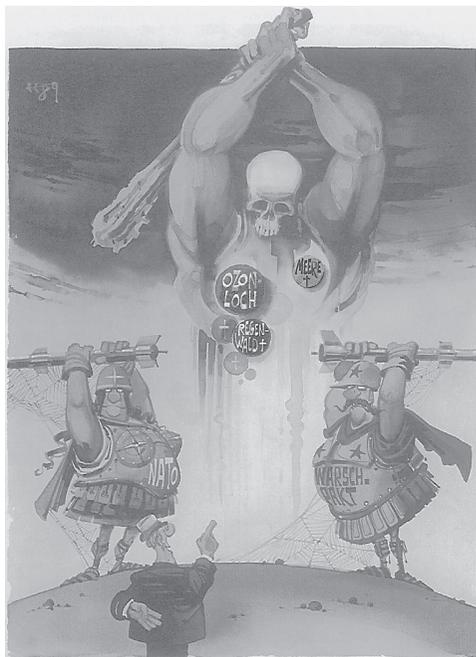


図11 <振り向いて見ろよ> 1989年1月
ハイツィンガー画
*左: NATO 右: ワルシャワ条約機構
中央奥: オゾン・ホール



図12 <幸多き明日を!> — <今度は人間のお二人は残って下さいね!>
1986年12月 ハイツィンガー画

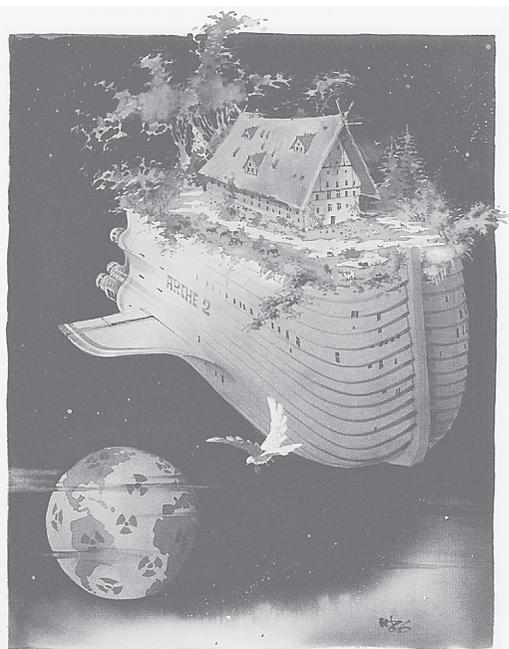


図13 「ノアはひたすら待機した。そして四千年経ったとき、ガイガー計測器をつけた鳩を放った……」
1986年5月 ハイツィンガー画

がまろうと出陣した当のものを盲目の鋭い感受性で逆に破壊してしまう⁴⁵。自然というドラゴン、それは本当に死んでしまったのだろうか。

もうひとつ別のイラストを例にとろう。そこでは、人間による学問・科学技術の世界が、オゾン・ホールと酸性雨によって、自然を殺人者に変貌させてしまっている。棍棒を振りあげ、今まさにあらゆるものをこなごなに砕こうとする死神である(図11)⁴⁶。自然問題は強大であり、それに対しては軍事的な威圧などはで啗すべき時代錯誤でしかない(これを表現した1989年のカリカチュアはそのアクチュアルな内容のゆえに、数年後にワルシャワ条約機構が存在しなくなると、時代遅れとなってしまった)。もともと、映像を注意深く他の種類に衝突に移しかえることもできる。そのカリカチュアは学問的な論議のある種のタイプの反映でもある。専門的な細かな議論をつづけているあいだに、(その前では粗さがしなどは古ぼけたものになりかねような)はるかに大きな問題がしのびよっていることにきづかかずにいるのである。ここで言わんとするのは、学問とはそうした問題を提示し、観衆は前面にあつて私たちに向かってこう叫ぶ、<振り向いて見ろよ!>。背景の人物像は、神話の狩人たる科学者(とはノルベルト・エリーアスの表現⁴⁷)によって追放されたものとしての神話の擬人化と解されるものではない。むしろ(無意識への忍びこみから目覚めて)今や科学者の存在をおびやかすものとなった神話的存在と見るべきはなからうか。私たちの時代が神話をもとめていることは見紛いようがない。それはたとえば、秘教じみた書き物が氾濫し、昔話をおもわせる口承文藝がブームとなっていることにあらわれている。古代ギリシアの神話もまた、自然神話とでも言うべきものとしてエコロジーのモチーフによるルネサンスを迎えている。たとえば、自己の生存の基盤をみずから損ねるミダース王の神話*などである。

現代の自然科学のなかで、神話がふたたび活力を得ている。絵画『方舟の王国』は、リー・ダレルの『ガイア 方舟の未来』(1987)となった⁴⁸。ジョナサン・キングダムは藝術家として自らその絵画をこう解説した⁴⁹。

世界とノアの方舟は一つである。そこには、生命のさまざまな種類が写しとられている。中心に位置する人間は多義的である。火薬庫(ここではぎらぎら光る波であらわされる)を爆発させようとし、同時にそれを止めようともする。人間はまたノアの姿

45 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Frontispiz.

46 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S. 89.

47 Norbert Elias, *Was ist Soziologie?* Weinheim/München 1970, S. 53.

48 Lee Durrell, *Gaia – Die Zukunft der Arche. Atlas zur Rettung unserer Erde*. Frankfurt/Main 1987 (Englische Originalausgabe London 1986).

49 同上, S. 16.

でもある。ネガティブな過去のシンボルはクアッガとドードーの斃れる姿であり*、他方、ポジティブな未来は、人間による破壊の火からフェニックスさながら飛び立つハワイガン (ネーネー)* である。倒れたゴリラの黒い身体と犀の白い巨体は、迫りくる絶滅を警告している。アラビア・カモシカは環境保護の実践のシンボルである。この絵画は、その構造の面で、壁布あるいは壁掛けを想起させるようにつくられている。つまり全一の世界観のシンボルである。

実際的な背景はどうであろうか。自然科学者のなかには次のように主張する人たちもいる。地球表面や大気や海洋の物理学的・化学的な性状は、生命によって、特にその必要に応じて支配されている。このガイア仮説 (ガイアとはギリシア神話の大地の女神) は、生態諸相の要素のあいだの多彩な関係を調査対象とする新たなシステム研究の発展へとつながってゆく。この点で、エコロジーの作品のなかでは、自然にかかわる事実を説明するにあたって、きわめて意識的に古い神話が引き合いにされる。終末を説くにあたって、原初の天地開闢神話ももちいられるのは言うまでもない。

ノアの箱舟のモチーフは、他の種類のイラストでも見うけられる。ハイツィンガーのイラストの一頁では、方舟から立ち去るにあたって、動物と植物、つまり自然界のすべてが、引率しようとする人間のカップルに向かってこう叫ぶ (図 12)。

今度は、人間のお二人は残って下さいね。

片や、人間の文明は、あらゆるシンボルの品々とともに、人間自身が生産した石油汚染のなかに沈んでゆく⁵⁰。しかも絵解きの下部には、いかにも自然科学と言わんばかりの、素人には解きようがないような無数の数字の行列とグラフ曲線がならんでいる。しかしこのイラストが伝えようとしているのは、ノアの方舟という神話的伝承との重なりにおいて生成した物の見方である。のみならず、プラスかマイナスかという二価的な論法と明確に定義された観察対象とむすびついた自然科学の方法によっても、すべてがとらえ切れるわけではない。たとえば、夕べのひとときの情感や別れの切なさ、安堵をあたえてくれる寄棟屋根のたたずまい、あるいはシダレヤナギの物言うかのようなしなやかな揺れ動き⁵¹。この種の経験も人間の現実であり、そこでもとめられるのは文化研究の解釈的な手法すなわ

50 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S. 27.

51 Karen Goy, *Vortrag bei einem Kolloquium des Rottendorf-Projekts zum Thema „Sprachherrschaft – Naturherrschaft: Zu einem angemessenen Sprechen von Natur“*. München, 13. XI. 1998.; 参照, 前出 (注16).

ち読解の技法である。

ノアの方舟を宇宙船として描いたハイツィンガーのイラストでは、カリカチュアは一回切りの風刺画の域を脱して一篇のコミック作品にまで広がっている⁵²。コミック作家は、一点を狙う風刺画家とは趣を異にして、物語の語り手となる⁵³。コミックの絵を目にする誰もが、そこに物語を読みとって空想をふくらませ、原画の描き手があらかじめ考えていなかったかも知れない次の展開にさそわれる(図13)。

ノアはひたすら待機した。そして四千年経ったとき、ガイガー計測器をつけた鳩を放った……

ここでは、藝術も文化研究も(当然ながら留保を要しはするが)神話を活用するのは当然であると言っておきたい。神話は、多次元的な意識事象であり、計算の向こうを張って語り物を呈示する。解説とは、語ることでもある。語ること、それは図解やアナロジーや全体を思念することを刺激し、合理的ななりゆきにとどまらず、思い入れによる一層の展開をもとめ、また比較商量の思索のあいだに間合いや反省をも必要とする。宇宙船「方舟2号」が、ノスタルジックな自然ユートピアの具現にとどまらないことは、そこにロケット・エンジンが搭載されているのを見るだけでもあきらかであろう。自然を相手取る現在のあり方はきわめて複雑であるが、それと同じく、ここでも事態はかなり輻輳している。文化研究と藝術(その読み解きには茫漠としたところがありはするが)との違いは、文化研究が自己の成果を、経験的なリアリティと照らし合わせつつ間断なく注意深くときほぐし、最後は(仮説としてではあれ)〈概念へとまとめ〉なければならないことにあるであろう⁵⁴。

〈方舟〉神話のモチーフも、時には物語性よりも、シンボル性を強めた使い方をされることがある。たとえば、1986年に世界自然保護基金の設立25周年にちなんで『WWFジャーナル』誌*の表紙に使われたイラストがそうである(図14)⁵⁵。この絵をどう解すべきだろうか。そこでは自然は、文明のための救命ボートとして登場する。すなわち蒸気船の海難にさいして、生き延びるためには絶対に放棄できない乗り物である。出版の文脈にとらわ

52 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.37.

53 参照, Robert Gernhardt, *Unsere Erde ist vielleicht ein Weibchen. 99 Sudelblätter zu 99 Sudelsprüchen von Georg Christoph Lichtenberg*. Zürich 1999, S.205 (Nachwort).

54 次の拙論を参照, Helge Gerndt, *Studienskript Volkskunde. Eine Handreichung für Studierende*. München 1997, S.195-199 (Nachwort zur dritten Auflage), bes. S.197.

55 参照, Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.29.

れずにこの図をみつめるなら、(ボートに乗っているのは) 趣味的な学問、すなわち(学問をめぐる応酬などではなく) 美しくはあるが役立たずと決めつけられる文化研究ではなかろうか、とつい考えてしまう。原子力でうごく機械の力で、そうした学問が、プラクティカルな諸々の学問、つまり自然や経済や工学などの専門にくっついて一緒に連れだされるのである。それどころか、しばしば余計とみられる装身具のようなものが、とっさのときには、唯一の持ち出し品となる可能性もある。たしかに、方舟の上では、誰もが救いされたのではなく、あらゆる財宝が持ち出されるはずなどなかった、と聖書は語っているのだが。

フォルクスウンデ(民俗学)は、誰を、あるいは何を救い出すのだろうか。フォルクスウンデの課題は、生き延びた伝統をひたすらまもることではなく、文化的遺産がそれぞれの具体的な日常にもつところの意味内容を踏みこんで省察し、それを仲介することにある。フォルクスウンデが意をもちいるのは、学問的に取り上げることとは、常に(神話についてももちろんそうだが)リアルに体験される日常生活に引き戻してからみあわせることであろう。それは資料源だけのことでなく、受けとめ側についてもそうである。それが特に関係するのは、複雑なものに脈絡をつけて目標を定める姿勢である。目標を定めるとは、時間的・空間的・社会的に特定することである。たとえば学問の成果は、それを社会的なディスカッションに移すには、その都度の状況に適う形態を必要とする。基本的には、日常も神話も汲めどもつきない。これが日常と神話を神秘なものにしている。

神話がどれほど発信力をもつかは、ここで例にとったノアの方舟で言えば、同じく救命ボートのモチーフながらそれが別の脈絡においてもみとめられることによっても明らかになろう(図15)⁵⁶。1988年にバルト海を囲む国々のあいだでこの内海の浄化に向けて合意されたバルト海宣言は、たしかに救命ボートの機能を果たすはずであったが、同時にたんなる意思表示にすぎない面もあった。つまり新聞報道が示唆するように、無拘束で紙の船のようにすぐに沈む不安定であり、そのためカリカチュアの格好の題材になった。しかしそれによって、カリカチュアの可能性が使い果たされることも屢々である。風刺画は、きっぱりと言いきり過ぎるところがあり、多くの場合プラカード的になってしまい、より深く神話的な語りものとなる次元を放棄し、つまるところ神秘ではなくなるのである。

しかし自然と文化の関係は神秘に満ちている。ハレにおけるドイツ民俗学会の大会のロゴマークが示唆するのは、民俗研究者たちがこの問題を意識している事実であろう(図16)。タービンの羽車の半分と数葉の花弁はどのように結びつくのだろうか。全体を鳥瞰するなら、二つは合体すれば一輪の花にみえ、したがって科学技術的・文化的なものが

⁵⁶ Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.102 oben.

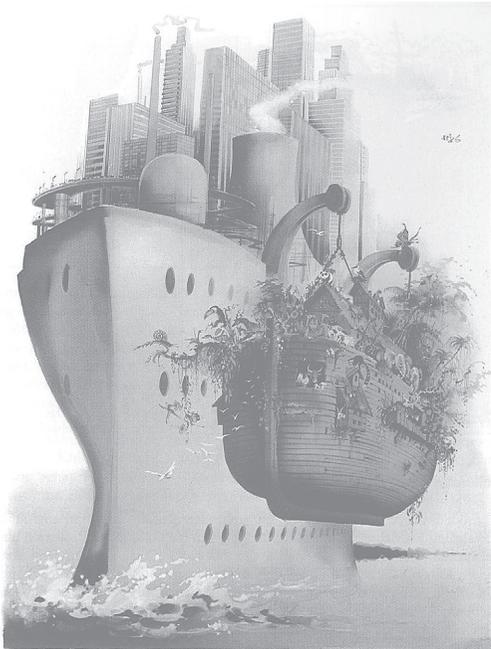


図14 「WWFジャーナル」表紙 1986年6月
ハイツィンガー画

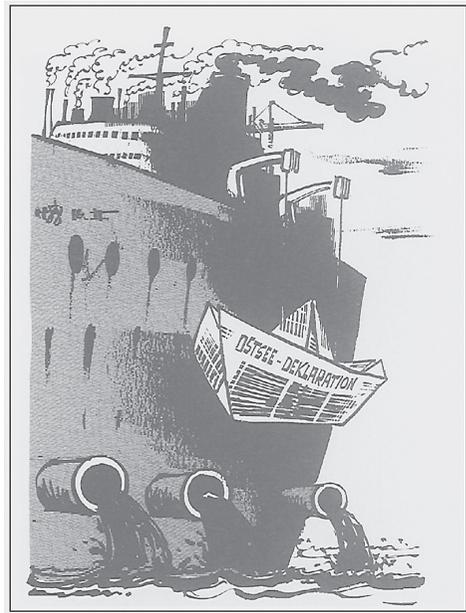


図15 バルト海宣言 1988年1月
ハイツィンガー画



図17 三聖王 (東方の三博士) <黄金と乳香と没薬よりも、こちらが御入用では……>
1989年1月 ハイツィンガー画



図18 神による世界の創造 13世紀

自然のなかに憩っている。あるいはそれは風車だろうか。そうすると逆に、自然の諸要素が文化の所産のなかにまとめられている。そこで色彩は、それはそれで何を指しているのだろうか。文化は死を表す黒に対応し、自然は命ある赤なのだろうか。黒い歯車が死んだ花卉に折り重なっているのだろうか。4つと3つのジグザグは、これまた何なのだろうか。黒い片輪車は、すでに半分食いちぎられた花を呑みこもうとする貪欲なパワーショベルをあらわすのかもしれない。かかる連想の意味づけは、もはや遊びとしてではない。しかし遊びはまじめになることができ、活発な問いになることもできる。

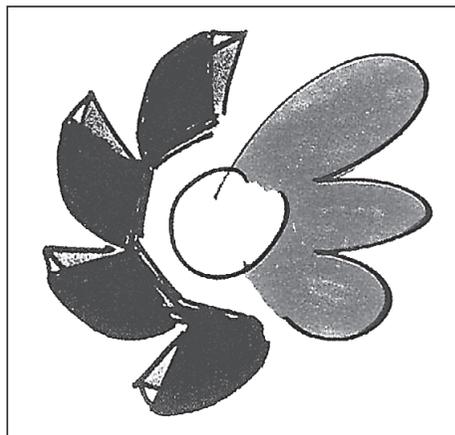


図16 ドイツ民俗学会の大会テーマ
「自然と文化」のロゴ 1999年
*左の4弁はブラック、右の3弁は赤

民俗学がかかわるのはシンボルの世界である。民俗学は、自然科学にくらべれば、ソフトで柔軟な方法を持ち、それだけに正確を期し得ない専門分野である。それは、最終的に見えてきた解答を法の形態にまとめてしまうのではなく、常にあらたにあらわれるパースペクティヴをくまなく照らしだすことができ、自己のものの見方に思いをめぐらす分野ということでもある。事実、フォルクスクンデ (民俗学) が得た結論は、固まりきらないでいる傾向がある。しかし、そこに強みもある。これを、最後の2例によって手短かに考えてみたい。

ハイツィンガーのイラストの本には、飼葉桶に生まれたキリストを前にした三聖王 (東方の三博士) が入っている (図17)。三聖王はそれぞれ品物を手にもっている。一人目は植木鉢、二人目はガラスの金魚鉢、三人目は風船⁵⁷。そして三人の聖王はこうのべる。

黄金と乳香と没薬よりも切実に御入用なのはこれでござりましょう。

それは誰に向かって言われるのだろうか。私たちに？ 否、聴き手は幼子キリストである。しかし何のために。キリストがわざわざ<汚染されない土>と<きれいな水>と<清浄な空気>と必要とするのだろうか。もちろん、人間を救うためである。それも、人間の新たな大罪から救い出すため。このイラストは神話を語っているのではなく、アレゴリー的な描き方である。なぜなら、その意味内容が、そのものずばりで示されている面があるからで

57 Horst Haitzinger, *Globetrottel*. (注2) Abb. S.83.

ある。とは言え、汚染された自然のテーマは、神話的・宗教的な局面におかれ、イラストを見る者の責任感覚をよびさます。

13世紀に描かれた絵解き聖書*には、世界を創造するキリストが描かれている(図18)。その絵が、1998年のカタログ『遺伝子と世界』の口絵にもちいられた。その年、そのタイトルの下、ドイツの諸都市で巡回展がおこなわれて話題を呼んだ⁵⁸。ミュンヘンでは「生命のABCをつかんで」、マンハイムでは「実験室から生命が?」、ドレスデンでは「人間をつくる作業場」、ボンでは「実験室のプロメテウス」。したがって、遺伝子技術をめぐる自然哲学・文化研究哲学の側からの挑戦が4つのタイトルで企画されたわけである⁵⁹。しかもそのうちの3つには疑問符がつき、うち一つにはプロメテウスの名前も挙がっている。言うまでもなく、巨人タイタンの息子で、おのれの姿にあわせて人間を作り出した神話の登場者である。この4種類のそれぞれに特徴のある展示企画は、多少ともキリスト像を背景にしていた。そこではキリストは、一方で宇宙すなわち自然をふまえ、他方で片手でコンパス(すなわち文化)を使っている。この中世の細密画から、自然と文化の関係について何が読みとれるだろうか。絵にこめられたのは、二分裂を止揚する自然神話の具現であろうか。現代の環境意識も伝統的な自然理解を養分に行っていると考えられないだろうか。

望むらくは、ここであきらかになるのが、たしかな回答よりも、むしろ問い(実際これが重要であることがめずらしくない)の勝るものであらんことを! よき問いには、地平をひらき、活力をたばねる作用がある。よき問いは動機づけと集中を得さしめ、展望と脈絡を創りだす。事実、多くの回答が過去のものとなしていった。なお残って私たちを動かすのは、問いである。なぜなら、いずれの展開も、いずれのパースペクティブも、問いを前にして身構えたり、新たな何かを産みだすからである。文化研究の最も重要な課題は<問題を解く>⁶⁰ことに先立って、意識をそなえ、生きることにつながる問いを見いだすことであろう。この点では、(言葉の翼を得た図像とも言うべき)神話もまたオーソドックスであることに縛られず、人差し指をあげて、問いがそぐわない場合には、回答がさほど役立たないことを合図してくれる。そして最後に、考察をかさねた果てに立ち現れる問いは、読者がさらに認識をもとめて羽ばたこうとするなら、それが必要とするだけの空間をひろげてくれるであろう……

58 Gen-Welten. (注43), 口絵。

59 厳密に言えば5種類であったとも言える。スイスでは (Vevey/Schweiz) „L'alimentation au fil du gene“ のタイトルで開催された。

60 参照, Karl R. Popper, *Alles Leben ist Problemlösen. Über Erkenntnis, Geschichte und Politik.* München 1994.

訳注：

- i (p.99) ナジマロス (Nagymaros)：ペシュト県 (首都ブダペストを含む) の小都市で手つかずの自然が残る。
- p.103 オルダス・ハクスリー (Aldous Leonard Huxley 1894-1963) のユートピア小説『すばらしき新世界』(Schöne neue Welt)：イギリスの作家。邦訳されている。
- p.107 『報知週覧』(Fliegende Blätter)：1844年に創刊され、1944年までミュンヘン尾のBraun & Schneider社から刊行された週刊誌。諧諷調を持ち味とし、またイラストやカリカチュアも売り物であった。〈ビーダーマイヤー〉の呼称のもととなった読み物が掲載された雑誌でもあった。またヴィルヘルム・ブッシュもこの雑誌から巣立っていった。
- p.107 テーオドル・フォンターネ (Heinrich Theodor Fontane 1819-98 ㊦Neuruppin BB ㊧ベルリン) のバラード「テイ湾の橋」(Ballade von der Brücke am Tay, 1880)：フォンターネは19世紀後半のドイツの代表的な小説家の一人。テイ橋 (Tay Bridge/Tay Rail Bridge) はスコットランドのテイ湾 (Firth of Tay) に架かり、ダンディー (Dundee) とファイフのウォーミット (Wormit/Fife) の間を結ぶ、全長3,264メートル (煉瓦造りの部分を含む) の鉄道橋。著名な鉄道技術者トーマス・パウチ (Thomas Bouch 1822-80) の設計で、鑄鉄と鍛鉄を組み合わせた格子構造であった (第一回ロンドン万博の水宮亭と共通の構造だが、鉄橋では負荷ははるかに大きくなる)。1879年12月28日、嵐のなかで鉄橋の中央部が走行中の列車を巻き込んで崩壊し、死者と行方不明者は75人に上ったとされる。事故の報道に衝撃を受けたフォンターネは一気にバラード作品を書きあげ、事故発生から10日目に発表した。近代技術が惹き起こした惨事として同時代に大きな衝撃をあたえ、また永く話題となった。他にも多数の作家がこれを題材にして文学作品を創った。
- p.108 民のいとなみ (Volksleben)：ドイツ民俗学では、伝統的に、その研究対象は „Volk“ とその活動態 „Volksleben“ とされてきた。前者はきわめて一般的な語であり、後者もひろく流布している合成語である。ドイツ人にとっては、どちらも内容はさだかでないままに実感のある語彙であり、それに依存したことが、民俗学が学問性において脆弱となった所以との批判がなされて起きた。ここでもそれを踏まえた文脈である。
- p.109 工業都市建設万国博覧会・エムシャー公園 (Internationale Bauausstellung = IBA Emscherpark)：ルール地方の北辺に周辺の17市町村の協力を得て1989年から99年まで開催された未来工業都市の展示プロジェクト。都市計画・社会・文化・エコロジーの多面的な角度からの総合企画であった。
- p.111 セント・ヘレンズ山 (Mount St. Helens)：アメリカ合衆国の北西部、ワシントン州にある活火山。本文のように1980年5月18日に大噴火を起こした。
- p.112 元型 (古態型) 的 (archepypisch)：スイスの精神分析学者ユング (Carl Gustav Jung 1875-1961) の概念。集団的無意識の根源にあり、夢やイメージの源泉として仮定された作用点。
- p.112 „Waldleerpfad“ と „e“ が二つに……： „Waldler“ は森歩きのトレッカーののだが、人格化の語尾のなかの e を重ねた „leer“ は〈空っぽ〉の意の形容詞になるので、〈森が裸になった小径〉とも読める。
- p.114 「漁師とその妻」(Der Fischer und seine Frau)：グリム兄弟の『昔話集』では次の筋をもつ。一 貧しい漁師が網にかかったヒラメを逃がしてやると、ヒラメは願いを変えてくれることになった。妻が〈こんな小便壺みたいなあばら家〉から逃げ出したいと言い、それを漁師がヒラメに伝えると叶えられた。しかし妻は満足せず、石造りの豪邸の主、王様、皇帝、と望みを次々に高めていった。漁

師が内心こわくなりながらも、願いを伝えると、そのたびごとに海は荒れ模様となり天候も陰しくなっていたが、ヒラメは願いを聞きとどけた。最後に妻がローマ教皇をのぞんだとき、二人は元の〈小便壺のような小さなあばら家〉に自分たちが戻っているのを知った。— 昔話のなかでも近縁譚の多い話類であるとともに、これに刺激された創作もみられる（ロシアのプーシキン作「金の魚」など）。

- p.118 ミダース王 (Midas) : ギリシア神話に登場する小アジアのフリジアの王。神によって、触れるものすべてを黄金に変える能力を授かったが、水を呑もうとすると川の水までが黄金になったために、その霊力を神に返した、とされる。川に砂金が産出することにちなんだ由来譚のようである。この王名は歴史的にも確認されている。
- p.119 クアッガ (Quagga) とドードー (Dodo) : いずれも人間によって絶滅させられた生き物。アフリカに棲んでいたクアッガはシマウマの一種で下半身にだけ縞模様をもっていた。ドードーはモーリシャス諸島で発見された、羽が退化した大型の鳥であった。
- p.119 ハワイガン (ネーネー Sandwichgans / Nēnē) : 絶滅の危機から救われた鳥類。ハワイ諸島に数万羽いたが、乱獲によって1951年には数十羽まで減少し、以後、保護活動によって増えつつある。
- p.120 世界自然保護基金 (World Wide Fund) …… 『WWFジャーナル』誌 (WWF-Journal) : 現在は „World Wide Fund for Nature (WWF)“ となっている。
- p.124 絵解き聖書 (Bible moralisée) : 聖書の場面を2700コマの豪華な細密画で表した書冊で、1250年頃にパリで宮廷用に製作された。現在は、ウィーンのオーストリア・ナショナル・ライブラリーの所蔵である (Codex Vindobonensis 2554)。その開巻の口絵に、コムパスを使う有名なキリスト像が、これだけは全ページ大で描かれている。